

インフルエンザ 研究者交流の会

— 第39回シンポジウム —

東京大学
弥生キャンパス
THE UNIVERSITY OF TOKYO
YAYOI CAMPUS

日本獣医学会微生物学分科会 共催

会期：2026年7月2日(木)～3日(金)

会場：東京大学・弥生講堂・一条ホール
(〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学農学部内)

会長：堀本 泰介
(東京大学 大学院農学生命科学研究科 獣医学専攻)

協賛：日本ウイルス学会

協力：東京大学 大学院農学生命科学研究科



【シンポジウム会場のご案内】

東京大学・弥生講堂・一条ホール

〒113-8657

東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学農学部内

TEL:03-5841-8205 FAX:03-5841-5028



～案内～

地下鉄

- ・東京メトロ 東大前駅(南北線) 徒歩 1 分
- ・東京メトロ 根津駅(千代田線) 徒歩 8 分

都バス

御茶ノ水駅(JR 中央線、総武線)より

茶 51 駒込駅南口又は東 43 荒川土手操車所前行

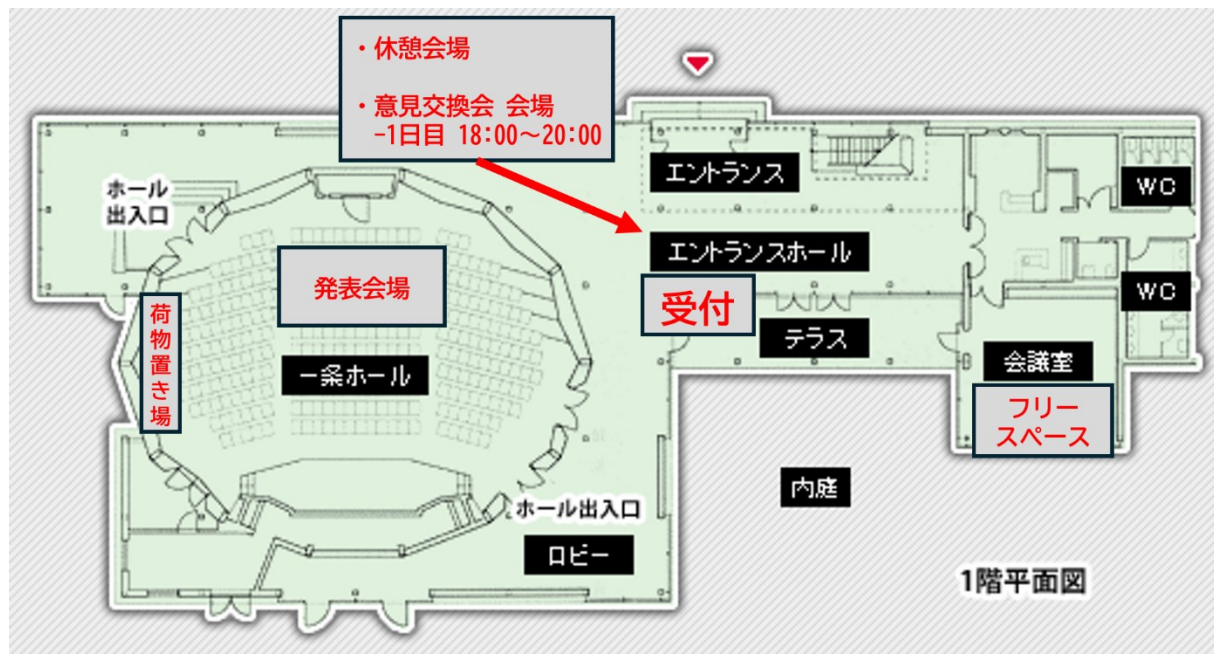
東大(農学部前バス停)下車徒歩 1 分

東京大学弥生講堂 一条ホール/アネックス

THE UNIVERSITY OF TOKYO
YAYOI AUDITORIUM, ICHIGO HALL/ANNEX



【弥生講堂 フロアマップ】



【意見交換会】

弥生講堂のエントランスホールで 18 時より開催いたします。

【参加者の皆様へ】

- 弥生講堂のエントランスホールにて受付をお願いします。
受付時間: 7 月 2 日(木)11:30~、7 月 3 日(金)9:15~
- 参加費の内訳は下記の通りです。
シンポジウム参加費 6,000 円(当日のお支払いは 7,000 円)
意見交換会参加費 4,000 円
学生の方は受付にて、参加費(意見交換会参加費を含む) 1,000 円をお支払いください。
- 受付時に、ネームカード、シンポジウム参加費領収書、意見交換会参加費領収書をお渡しします。
- シンポジウム会場および意見交換会会場ではネームカードの着用をお願いします。
- クロークはありませんので、必要に応じて、大きな荷物は一条ホール(発表会場)の右側の空きスペースに置いてください。貴重品は必ず各自でお持ちください。
- 昼食は会場内でも可能です。また、大学内の生協、食堂、周辺の飲食店もご利用ください。

【座長の皆様へ】

- ご担当の演題の開始 5 分前までに会場前列にお越しください。
- 時間厳守の進行にご協力をお願いいたします。

【発表者の皆様へ】

- 各自の PC を備え付けの HDMI ケーブルでプロジェクターに接続して操作し、発表を行ってください。なお、PC の端子が HDMI でない場合は、対応する変換ケーブルを各自ご持参ください。あらかじめ接続を確認されたい方は、休憩時間にスタッフにお声がけください。
- 次演者は、発表前に客席前方右手の席に着席してください。
- 時間厳守にご協力をお願いいたします。ベルは、発表終了前 1 分に 1 回、発表終了時に 2 回、質疑応答終了時の 3 回鳴ります。
 - 一般演題 発表 10 分、質疑応答 4 分、交代 1 分
 - シンポジウム 発表 25 分、質疑応答 4 分、交代 1 分
- プライバシー保護の観点に留意した発表をお願いいたします。
- 利益相反(COI)がある場合は、開示をお願いします。

1日目	座長		発表者	所属	演題名
開会挨拶		13:00-13:05			
一般演題 ①	曾田公輔（鳥取大）	13:05-13:20	○佐久間 咲希1、西浦 颯1、高館 佳弘1、峯 淳貴1、常國 良太1、井関 博1、池谷 隆男1、内田 裕子1、宮澤 光太郎1	1 農研機構 動衛研	2025/26シーズンに国内で分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスの遺伝子系統解析
	宮澤光太郎（動衛研）	13:20-13:35	○池谷 隆男1、西浦 颯1、井関 博1、高館 佳弘1、佐久間 咲希1、峯 淳貴1、常國 良太1、前田 美紀1、内田 裕子1、宮澤 光太郎1	1 農研機構 動衛研 ウイルス感染症研究領域 人獣共通感染ウイルスグループ	2025/26シーズンに国内で新たに確認された高病原性鳥インフルエンザウイルスの鶏に対する病原性解析
		13:35-13:50	○日尾野 隆大1,2,3,4、市川 世識1,2、青島 圭佑1,2、栗野 里香1,3、大谷 祐紀1,2、磯田 典和1,2,3,4、松野 啓太1,3,4、大沼 学5、迫田 義博1,2,3,4、直 亨則1,3,4	1 北大 OHRC、2 北大院 獣医、3 北大 人獣研、4 北大 ワクチン拠点、5 国立環境研究所	2025-2026年シーズンに認められた哺乳動物における高病原性鳥インフルエンザウイルス感染例の解析
		13:50-14:05	○小林 広子1、七戸 新太郎1、日尾野 隆大2,3,4,5、磯田 典和2,3,4,5、迫田 義博2,3,4,5、渡辺 登喜子1,6,7	1 阪大 微研、2 北大院 獣医、3. 北大 OHRC、4 北大 IVReD、5 北大 人獣研、6 阪大 CIDER、7. 阪大 CAMaD	北海道の海棲哺乳類から分離されたclade 2.3.4.4b H5N1高病原性鳥インフルエンザウイルスの性状解析
		14:05-14:20	○川西 奈那子1、日尾野 隆大2、上林 義範1、坂内 天1、辻村 行司1、山中 隆史3、磯田 典和2、迫田 義博2、根本 学1	1 JRA 総研、2 北大 獣医、3 JRA 美浦トレセン	国内飼養馬におけるH5N1鳥インフルエンザの血清学的調査
		14:20-14:35	池田 耀1、○曾田 公輔1,2、笛吹 達史1,2、伊藤 啓史1,2	1 鳥取大 農 共同獣医、2 鳥取大 AIDGH	野生水禽から分離されたH7亜型低病原性鳥インフルエンザウイルスの遺伝子と抗原性の解析
一般演題 ②	村木靖（岩手医大）	14:35-14:50	○川上 千春1,2、坂井(田川) 優子1,2、岩附 研子2,3、山吉 誠也1,2,3、時田 章史4、河岡 義裕1,2,3,5	1 JIHS国際医療研、2 東大国際高等研、3 東大医科研、4 クリニックばんびに、5 ウィスコンシン大学マディソン校 獣医	2025/26シーズンのインフルエンザウイルスの遺伝子解析
	高下恵美（感染研）	14:50-15:05	○松野 成美1,2、YI LINA1、齋藤 玲子1,2、Japanese Influenza Collaborative Study Group3、我妻 奎太1、田村 務2、渡部 久実2	1新潟大 医歯保健学研究科国際保健学分野、2新潟大 ミャンマー感染症研究拠点、3 Japanese Influenza Collaborative Study Group	2025-26年シーズンの日本におけるインフルエンザサブクレードKの検出とパロキサビル投与後の耐性出現頻度
		15:05-15:20	○岩附 研子1、今井 正樹1,2、石橋 徹3、山田 晋弥1、木曾 真紀1、伊藤 睦美1、安原 敦洋1、山吉 誠也1,2、河岡 義裕1,2,4	1 東大、2 JIHS、3 塩野義、4 ウィスコンシン大	サルモデルにおける高病原性鳥インフルエンザA(H7N9)ウイルスに対するパロキサビルマルボキシルの有効性評価
		15:20-15:35	○田村 務1、松野 成美1,2,YI LINA2,渡部 久実1、齋藤 玲子1,2	1 新潟大学ミャンマー拠点、2 新潟大学国際保健	ミャンマーのヤンゴン市におけるヒトメタニューモウイルスの動向-2023-2025-
休憩					
一般演題 ③	百瀬文隆（感染研）	15:50-16:05	香曾我部 蒼真1、野地 博行1、○田端 和仁1,2	1東大院 工、2東大RIPH	インフルエンザウイルスにおける分節化ゲノムの必要性
	日尾野隆大（北大）	16:05-16:20	○野上 千華1,2、中野 雅博3、宮本 翔3,4、杉田 征彦1,2、村本 裕紀子1,2、野田 岳志1,2	1 京大 医生研、2 京大 院生命、3 JIHS 感染研、4 千葉大 医学研究院	インフルエンザウイルスvRNPの超複合体形成におけるRNA-RNA相互作用の役割
		16:20-16:35	○前川 明博1、日尾野 隆大2,3,4,5、迫田 義博2,3,4,5、喜田宏 4,5、花松 久寿6、古川 潤一6,7、桐谷内 晶1,8、西原 祥子1,8、高瀬 明1,8	1 創価大 理工学研究科、2 北大 獣医、3 北大 One Healthリサーチセンター、4 北大 人獣研、5 北大 ワクチン拠点、6 名大 糖鎖生命コア研究所、7 北大 医学研究院、8 創価大 糖鎖生命システム融合研究所	糖鎖改変細胞を用いたカモインフルエンザウイルスの増殖性に寄与する糖鎖構造の解析
		16:35-16:50	○中畑 勇人1、前川明博 1、韓世熙 2、日尾野 隆大2,3,4,5、迫田 義博2,3,4,5、喜田 宏 4、桐谷内 晶1,6、西原 祥子1,6、高瀬 明1,6	1 創価大 理工学研究科、2 北大 獣医、3 北大 One Healthリサーチセンター、4 北大 人獣研、5 北大 ワクチン拠点、6 創価大 糖鎖生命システム融合研究所	硫酸化糖鎖過剰発現細胞を用いた鳥インフルエンザウイルスの結合性解析
		16:50-17:05	○祐村 清悟1、前田 美紀1	1 農研機構 動物衛生研究部門	A型インフルエンザウイルスヘマグルチニンの糖鎖被覆解析
一般演題 ④	藤井豊（仙台医療センター）	17:05-17:20	○畠山 大1,2、庄司正樹2、三木悠輔2、植木正二3、山口健太郎3、中島勝幸2、田中好幸2、横川真梨子4、大澤匡範4、葛西祐介2、今川 洋2、橋本里菜5,6、高山和雄5,6、葛原 隆2	1東邦大・薬、2徳島文理大・薬、3徳島文理大・香川薬、4慶應義塾大・薬、5京都大・iPS研、6東京科学大・総合研究院	新型コロナウイルスSタンパク質はアミノグリコシド系抗生剤と相互作用する
		17:20-17:40	○廣津 伸夫1、大和久 正人2	1 廣津医院、2 ミズホメディー	COVID-19：パンデミックからエンデミックへの変遷、そのメカニズムを考える

2日目					
一般演題 ⑤	渡辺真治 (感染研) 渡辺登喜子 (阪大)	9:15- 9:30	○内藤 忠相、國塩 幸、齊藤 峰輝	川崎医科大学 微生物学教室	組換え弱毒生インフルエンザワクチン株の開発
		9:30- 9:45	○七戸 新太郎1、李 清欣1、渡邊 謙一2、田中 浩輝3,4、Jessica Anindita4、吉本 紗良1、Kaewaroon Nantaporn1、下岡 誠1、Luthfi Muawan1、元岡 大祐3,5、安齋 樹1、秋田 英万3,4、渡辺 登喜子1,3,5	1 阪大微研 分子ウイルス分野、2 帯畜大 獣医、3 阪大 CAMaD、4 東北大 薬学研究科、5 阪大微研 バイオインフォマティクスセンター、6 阪大 CiDER	Clade 2.3.2.1e H5N1ヒト分離株の性状解析とmRNAワクチンの交差防御能
		9:45- 10:05	○田中 敏博1、辻 亜友子2、荻嶋 春奈2、中村 和也2	1静岡厚生病院 小児科 2静岡厚生病院 臨床検査科	①経鼻弱毒生インフルエンザワクチン（フルミスト®）の接種後、ワクチン株ウイルスはいつまで鼻腔内に残存するのか？ ②経鼻弱毒生インフルエンザワクチン（フルミスト®）の家族内伝播の検証
		10:05- 10:20	○千葉 志穂1,2,3、木曾 真紀2、Paul Radspinner4、Renee Herber4、Pamuk Bilsel4、河岡 義裕1,2,3,5	1JIHS、2東大新世代感染症センター、3ウィスコンシン大学マディソン校、4FluGen、5東大医科研究	インフルエンザ三価M2SR経鼻ワクチンの前臨床モデルにおける免疫応答の解析
		10:20- 10:35	○中田 渚 1、神田 明日美 1、奈良原 誠大 1、三股 亮大郎 1	1デンカ（株）ワクチン研究課	mRNAインフルエンザワクチンの最適化について
休憩					
一般演題 ⑥	斉藤玲子 (新潟大) 古瀬祐気 (東大)	10:50- 11:05	○上野 みなみ1,4、竹前 喜洋1,4、百瀬 文隆 1,4、大場 邦弘2,3、渡邊 真治4、影山 努1,4	1 感染研 検査診断技術研究部、2 公立昭和病院 小児科、3 公立昭和病院 感染管理部、4 感染研 インフルエンザ研究センター	経鼻弱毒生インフルエンザワクチン（フルミスト®点鼻液）由来ウイルス株と季節性インフルエンザウイルス株の識別検出法の構築
		11:05- 11:20	○久場 由真仁1,2、竹前 喜洋1,2、大場 邦弘 3,4、影山 努1,2	1感染研 検査診断部、2 感染研 インフルセンター、3 公立昭和病院 小児科、4 公立昭和病院 感染管理部	ターゲットキャプチャー法とロングリードシーケンスを統合したNGS法の構築
		11:20- 11:35	大宮 卓1、川村 和久2、永井 幸夫3、大沼 良一4、横田 雅司5、○藤井 豊1、西村 秀一1	1仙台医センター ウイルス、2かわむらこどもクリニック、3永井小児科、4仙台医センター 小児、5横田耳鼻科	迅速診断キットの使用済み検体からのウイルス分離の試み
		11:35- 11:50	○村上裕子1、関なおみ1、齋藤智也1、竹前喜洋2、影山努2	1. 感染所 感染症危機管理研究センター 危機管理総括部第一室、2. 感染研 検査診断技術研究部	国立感染症研究所における新型インフルエンザ等感染症/パンデミックへの備え
		11:50- 12:05	○最上 聡文、平床 聖也、根津 友祐、宮國 樹	東ソー（株）ライフサイエンス研究所	細胞製造を高効率化する機能性マイクロキャリア
休憩					
特別講演 ①	堀本泰介 (東大)	13:30- 14:00	○河岡 義裕	UTOPIA	高病原性鳥インフルエンザウイルスに対するワクチンと抗ウイルス薬の有効性
		14:00- 14:30	○根本 学	JRA総研	馬インフルエンザ
		14:30- 15:00	○磯田 典和1,2,3,4、日尾野 隆大1,2,3,4、迫田 義博1,2,3,4	1北大院 獣医 微生物、2北大 One Healthリサーチセンター、3北大 人獣研、4北大 ワクチン拠点	北海道大学における鳥インフルエンザワクチンの開発
休憩					
特別講演 ② 特別講演 ③	高田礼人 (北大)	15:15- 15:45	○前田 秋彦	京都産業大学 生命科学部	京都市に生息するマダニから分離した、（未）人獣共通感染症としてのトゴトウイルス
		15:45- 16:15	○前田 健	JIHS国立感染研	ThogotoおよびOzウイルスの動物への感染
	長谷川秀樹 (感染研)	16:15- 16:40	○海老原 秀喜	JIHS国立感染研	ハンタウイルス肺症候群について
		16:40- 17:05	○高田 礼人	北大 人獣	フィロウイルスについて
総会 閉会挨拶		17:05- 17:20			

第 39 回 インフルエンザ研究者交流の会 要旨集

【一般演題-1】

第 1 日目 7 月 2 日(水) 13:05～14:35

座長: 曾田 公輔(鳥取大学)／宮澤 光太郎(農研機構 動衛研)

01-1 2025/26 シーズンに国内で分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスの遺伝子系統解析

○佐久間 咲希 1、西浦 颯 1、高館 佳弘 1、峯 淳貴 1、常國 良太 1、井関 博 1、池谷 隆男 1、内田 裕子 1、宮澤 光太郎 1

1 農研機構 動衛研

2025/26 シーズンに国内で分離された高病原性鳥インフルエンザウイルスは、全 8 分節遺伝子を用いた系統解析により、5 シーズン連続で検出されている G2d-0 遺伝子型と新たな 4 つの遺伝子型に分類された。

01-2 2025/26 シーズンに国内で新たに確認された高病原性鳥インフルエンザウイルスの鶏に対する病原性解析

○池谷 隆男 1、西浦 颯 1、井関 博 1、高館 佳弘 1、佐久間 咲希 1、峯 淳貴 1、常國 良太 1、前田 美紀 1、内田 裕子 1、宮澤 光太郎 1

1 農研機構 動衛研 ウイルス感染症研究領域 人獣共通感染ウイルスグループ

2025/26 シーズンに国内で新たに確認された 3 つの遺伝子型(G2c-19、G2c-20、G2c-21)に分類される高病原性鳥インフルエンザウイルスを鶏に経鼻接種し病原性を解析したので、その結果を報告する。

01-3 2025-2026 年シーズンに認められた哺乳動物における高病原性鳥インフルエンザウイルス感染例の解析

○日尾野 隆大 1,2,3,4、市川 世識 1,2、青島 圭佑 1,2、栗野 里香 1,3、大谷 祐紀 1,2、磯田 典和 1,2,3,4、松野 啓太 1,3,4、大沼 学 5、迫田 義博 1,2,3,4、直 亨則 1,3,4

1 北大 OHRC、2 北大院 獣医、3 北大 人獣研、4 北大 ワクチン拠点、5 国立環境研究所

当該シーズンに認められたテン、アライグマ、タヌキ、キタキツネの HPAIV 感染例を解析し、分離ウイルスは関連する鳥由来株と遺伝的に近縁なこと、また体内でのウイルス分布に多様なパターンがあることを示した。

01-4 北海道の海棲哺乳類から分離された clade 2.3.4.4b H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスの性状解析

○小林 広子 1、七戸 新太郎 1、日尾野 隆大 2,3,4,5、磯田 典和 2,3,4,5、迫田 義博 2,3,4,5、渡辺 登喜子 1,6,7

1 阪大 微研、2 北大院 獣医、3 北大 OHRC、4 北大 IReD、5 北大 人獣研、6 阪大 CiDER、7 阪大 CAMaD

2025 年春、国内で初めて海棲哺乳類から H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスが分離された。本研究では、同時期に分離された海鳥、アザラシ、およびラッコ由来の計 6 株について、in vitro と in vivo でのウイルス性状を解析した。

01-5 国内飼養馬における H5N1 鳥インフルエンザの血清学的調査

○川西 奈那子 1、日尾野 隆大 2、上林 義範 1、坂内 天 1、辻村 行司 1、山中 隆史 3、磯田 典和 2、迫田 義博 2、根本 学 1

1 JRA 総研、2 北大 獣医、3 JRA 美浦トレセン

国内の馬 400 頭に対し H5N1 鳥インフルエンザの抗体検査を行った結果、全頭陰性であった。国内馬への感染リスクは低いと考えられるが、哺乳類への感染拡大を受け、今後も継続的な監視が必要である。

01-6 野生水禽から分離された H7 亜型低病原性鳥インフルエンザウイルスの遺伝子と抗原性の解析

池田 耀 1、○曾田 公輔 1,2、笛吹 達史 1,2、伊藤 啓史 1,2

1 鳥取大 農 共同獣医、2 鳥取大 AIDGH

近年、H7 亜型の低病原性鳥インフルエンザウイルス(LPAIV)の HA 遺伝子の系統が多様化している報告がある。本研究では 1980 年以降の国内の野生水禽糞便分離 H7 LPAIV の遺伝子と抗原性を調べた。

【一般演題-2】

第1日目 7月2日(水) 14:35~15:35

座長:高下 恵美(感染研)／村木 靖(岩手医大)

O2-1 2025/26 シーズンのインフルエンザウイルスの遺伝子解析

○川上 千春 1,2、坂井(田川) 優子 1,2、岩附 研子 2,3、山吉 誠也 1,2,3、時田 章史 4、河岡 義裕 1,2,3,5

1 JIHS 国際医療研、2 東大国際高等研、3 東大医科研、4 クリニックばんびい、5 ウィスコンシン大学マディソン校 獣医学部

2025/26 シーズンはサブクレード K の AH3 型ウイルスとサブクレード C.3.3 の B 型ウイルスによる大流行であった。薬剤耐性遺伝子検査では、バロキサビル治療後の検体から PA/I38 変異株が 3 割以上にみられ、半数は投与後 3 日以内に分離された。

O2-2 2025-26 年シーズンの日本におけるインフルエンザサブクレード K の検出とバロキサビル投与後の耐性出現頻度

○松野 成美 1,2、YI LINA1、齋藤 玲子 1,2、Japanese Influenza Collaborative Study Group3、我妻 奎太 1、田村 務 2、渡部 久実 2

1 新潟大院 医歯保健 国際保健学分野、2 新潟大 ミャンマー感染症研究拠点、3 Japanese Influenza Collaborative Study Group

2025-26 年シーズンの日本のインフルエンザ流行株と抗ウイルス薬耐性を解析した。H3N2 が主流で subclade K に属した。BA 投与後 11 例に PA/I38 変異、OS 投与後 1 例に NA 変異が出現した。

O2-3 サルモデルにおける高病原性鳥インフルエンザ A(H7N9)ウイルスに対するバロキサビルマルボキシルの有効性評価

○岩附 研子 1、今井 正樹 1,2、石橋 徹 3、山田 晋弥 1、木曾 真紀 1、伊藤 睦美 1、安原 敦洋 1、山吉 誠也 1,2、河岡 義裕 1,2,4

1 東大、2 JIHS、3 塩野義、4 ウィスコンシン大

O2-4 ミャンマーのヤンゴン市におけるヒトメタニューモウイルスの動向 -2023-2025-

○田村 務 1、松野 成美 1,2、YI LINA2、渡部 久実 1、齋藤 玲子 1,2

1 新潟大 ミャンマー拠点、2 新潟大 国際保健

2023 年からヤンゴンで実施している呼吸器感染症のサーベイランスで、ヒトメタニューモウイルスは検出病原体の約 5%を占めた。A2b2-B2-A2b2 と毎年主流となる遺伝子型の入れ替わりが確認された。

【一般演題-3】

第 1 日目 7 月 2 日(水) 15:50~17:05

座長:百瀬 文隆(感染研)／日尾野 隆大(北大)

03-1 インフルエンザウイルスにおける分節化ゲノムの必要性

香曾我部 蒼真 1、野地 博行 1、○田端 和仁 1,2

1 東大院 工、2 東大 RIPH

インフルエンザウイルスの進化や増殖に対する分節化ゲノムの必要を議論します。

03-2 インフルエンザウイルス vRNP の超複合体形成における RNA-RNA 相互作用の役割

○野上 千華 1,2、中野 雅博 3、宮本 翔 3,4、杉田 征彦 1,2、村本 裕紀子 1,2、野田 岳志 1,2

1 京大 医研、2 京大 院生命、3 JIHS 感染研、4 千葉大 医学研究院

選択的ゲノムパッケージング機構解明のため、粒子内の相補的塩基対を介した RNA 間相互作用を化学的に架橋し、精製 vRNP 超複合体を高速 AFM 原子間力顕微鏡・電子顕微鏡で解析した。これにより RNA 間相互作用による vRNP 間結合を可視化した。

03-3 糖鎖改変細胞を用いたカモインフルエンザウイルスの増殖性に寄与する糖鎖構造の解析

○前川 明博 1、日尾野 隆大 2,3,4,5、迫田 義博 2,3,4,5、喜田 宏 4,5、花松 久寿 6、古川 潤一 6,7、梶谷内 晶 1,8、西原 祥子 1,8、高瀬 明 1,8

1 創価大院 理工、2 北大 獣医、3 北大 OHRC、4 北大 人獣研、5 北大 ワクチン拠点、6 名大 糖鎖生命コア研究所、7 北大 医学研究院、8 創価大 糖鎖生命システム融合研究所

糖転移酵素遺伝子の導入と、レクチンの結合性に基づいた細胞の分取によって、カモ H5 亜型ウイルスの結合性と増殖性が共に高い細胞を得ることができた。これらの細胞について糖鎖構造解析を行った結果を報告する。

03-4 硫酸化糖鎖過剰発現細胞を用いた鳥インフルエンザウイルスの結合性解析

○中畑 勇人 1、前川 明博 1、韓 世熙 2、日尾野 隆大 2,3,4,5、迫田 義博 2,3,4,5、喜田 宏 4、梅谷内 晶 1,6、西原 祥子 1,6、高瀬 明 1,6

1 創価大 理工、2 北大 獣医、3 北大 OHRC、4 北大 人獣研、5 北大 ワクチン拠点、6 創価大 糖鎖生命システム融合研究所

N-アセチルグルコサミンの 6 位に硫酸基を付加する酵素遺伝子を導入した細胞において、ニワトリ H6 亜型ウイルス HA の結合性が有意に上昇した。

03-5 A 型インフルエンザウイルスヘマグルチニンの糖鎖被覆解析

○祐村 清悟 1、前田 美紀 1

1 農研機構 動物衛生研究部門

分子動力学シミュレーションによりヘマグルチニンのグリカンシールド効果を調査した。シミュレーション結果の可視化により、結合糖鎖の数や位置が異なる分子では被覆範囲が全く異なることが明らかとなった。

【一般演題-4】

第 1 日目 7 月 2 日(水) 17:05~17:40

座長: 藤井 豊(仙台医療センター)

04-1 新型コロナウイルスSタンパク質はアミノグリコシド系抗生剤と相互作用する

○畠山 大 1,2、庄司 正樹 2、三木 悠輔 2、植木 正二 3、山口 健太郎 3、中島 勝幸 2、田中 好幸 2、横川 真梨子 4、大澤 匡範 4、葛西 祐介 2、今川 洋 2、橋本 里菜 5,6、高山 和雄 5,6、葛原 隆 2

1 東邦大・薬、2 徳島文理大・薬、3 徳島文理大・香川薬、4 慶應義塾大・薬、5 京都大・iPS 研、6 東京科学大・総合研究院

本研究では S タンパク質がどの糖・糖鎖と相互作用し得るのか網羅的に調べ、結合機構の解明を試みた。また、ヒト iPS 由来肺オルガノイドを用いた感染実験を行い、抗ウイルス効果の有無も解析したので、報告する。

04-2 COVID-19: パンデミックからエンデミックへの変遷、そのメカニズムを考える

○廣津 伸夫 1、大和久 正人 2

1 廣津医院、2 ミズホメディー

COVID-19 患者 6,128 例を対象とし、2020 年からの 6 年間を変異株の変遷に伴い 7 期に分類し、臨床症状、白血球の動態、ウイルス量、家庭内感染の推移を観察するとともに、ワクチン、再感染が流行に及ぼす影響を評価した。

【一般演題-5】

第 2 日目 7 月 3 日(木) 9:15~10:35

座長: 渡辺 真治(感染研) / 渡辺 登喜子(阪大)

05-1 組換え弱毒生インフルエンザワクチン株の開発

○内藤 忠相、國塩 幸、齊藤 峰輝

川崎医科大学 微生物学教室

インフルエンザウイルスの RNA ポリメラーゼに単一アミノ酸変異を導入することで低温増殖馴化性と遺伝的安定性を獲得した。このウイルス性状を応用して、組換え弱毒生ワクチンの開発研究を進めている。

05-2 Clade 2.3.2.1e H5N1 ヒト分離株の性状解析と mRNA ワクチンの交差防御能

○七戸 新太郎 1、李 清欣 1、渡邊 謙一 2、田中 浩揮 3,4、Jessica Anindita4、吉本 紗良 1、Kaewaroon Nantaporn1、下岡 誠 1、Luthfi Muawan1、元岡 大祐 3,5、安齋 樹 1、秋田 英万 3,4、渡辺 登喜子 1,3,5

1 阪大微研 分子ウイルス分野、2 帯畜大 獣医、3 阪大 CAMaD、4 東北大 薬学研究科、5 阪大微研 バイオインフォマティクスセンター、6 阪大 CiDER

Clade 2.3.4.4b 系統の HA を発現する LNP-mRNA ワクチンが、Clade 2.3.2.1e に属する H5N1 高病原性鳥インフルエンザウイルスに対して強固な交差防御能を付与することを示した。

05-3 ①経鼻弱毒生インフルエンザワクチン(フルミスト®)の接種後、ワクチン株ウイルスはいつまで鼻腔内に残存するのか？ ②経鼻弱毒生インフルエンザワクチン(フルミスト®)の家族内伝播の検証

○田中 敏博 1、辻 亜友子 2、荻嶋 春奈 2、中村 和也 2

1 静岡厚生病院 小児科、2 静岡厚生病院 臨床検査科

経鼻弱毒生インフルエンザワクチンが、接種後、いつまで鼻腔内で検出され得るのか、また懸念されているよ

うに同居の家族に水平伝播し得るのか、検証した。

05-4 インフルエンザ三価 M2SR 経鼻ワクチンの前臨床モデルにおける免疫応答の解析

○千葉 志穂 1,2,3、木曾 真紀 2、Paul Radspinner4、Renee Herber4、Pamuk Bilisel4、河岡 義裕 1,2,3,5

1 JIHS、2 東大新世代感染症センター、3 ウィスコンシン大学マディソン校、4FluGen、5 東大医科研

インフルエンザ三価 M2SR ワクチンは、非増殖型ウイルスを基盤とする経鼻接種型新規モダリティワクチンである。本研究では、その誘導する免疫応答の特徴を不活化ワクチンと比較し検討した。

05-5 mRNA インフルエンザワクチンの最適化について

○中田 渚 1、神田 明日美 1、奈良原 誠大 1、三股 亮太郎 1

1 デンカ(株)ワクチン研究課

mRNA ワクチンは高い有効性を有するが、強い副反応が高頻度で起きることが課題である。我々は、有効性及び安全性に優れた mRNA インフルエンザワクチン創製を目指し、mRNA ワクチンの最適化に取り組んだ。

【一般演題-6】

第2日目 7月3日(木) 10:50~12:05

座長：古瀬 祐気(東大)／齊藤 玲子(新潟大)

06-1 経鼻弱毒生インフルエンザワクチン(フルミスト®点鼻液)由来ウイルス株と季節性インフルエンザウイルス株の識別検出法の構築

○上野 みなみ 1,4、竹前 喜洋 1,4、百瀬 文隆 1,4、大場 邦弘 2,3、渡邊 真治 4、影山 努 1,4

1 JIHS 感染研 検査診断技術研究部、2 公立昭和病院 小児科、3 公立昭和病院 感染管理部、4 JIHS 感染研 インフルエンザ研究センター

フルミスト®点鼻液接種後にインフルエンザ陽性と診断された患者検体中の生ワクチン株と季節性株の判別可能な、Duplex リアルタイム RT-PCR による識別検出法を構築した。

06-2 ターゲットキャプチャー法とロングリードシーケンスを統合した NGS 法の構築

○久場 由真仁 1,2、竹前 喜洋 1,2、大場 邦弘 3,4、影山 努 1,2

1 感染研 検査診断部、2 感染研 インフルセンター、3 公立昭和病院 小児科、4 公立昭和病院 感染管理部

SARS-CoV-2 とインフルエンザウイルスの一部領域のみをカバーするプローブを用いたターゲットキャプチャー法とロングリードシーケンスの組み合わせにより、全長ゲノム再構築が可能な NGS 法を構築した。

O6-3 迅速診断キットの使用済み検体からのウイルス分離の試み

大宮 卓 1、川村 和久 2、永井 幸夫 3、大沼 良一 4、横田 雅司 5、○藤井 豊 1、西村 秀一 1

1 仙台医センター ウイルス、2 かわむらこどもクリニック、3 永井小児科、4 仙台医センター 小児、5 横田耳鼻科

ウイルス性上気道炎の診断とウイルス分離のため、2 度鼻咽頭を拭うのは、患者の同意が得られにくい。迅速診断キットの抽出液の残りを使用して、ウイルス分離を試みた。

O6-4 国立感染症研究所における新型インフルエンザ等感染症パンデミックへの備え

○村上 裕子 1、関 なおみ 1、齋藤 智也 1、竹前 喜洋 2、影山 努 2

1 JIHS 国立感染症 感染症危機管理研究センター 危機管理総括部第一室、2 JIHS 国立感染症 検査診断技術研究部

JIHS 国立感染症研究所内におけるインフルエンザ関連部門の情報共有、ネットワーク形成、BCP 策定など、パンデミックへの事前準備(ブリペアドネス)の状況と今後の展望について報告する。

O6-5 細胞製造を高効率化する機能性マイクロキャリア

○最上 聡文、平床 聖也、根津 友祐、宮國 樹

東ソー(株)ライフサイエンス研究所

温度応答機能を付与したマイクロキャリアを開発した。冷却により細胞の剥離ができ、さらに細胞の種類によって接着性能をチューニングできる。当日は高効率な細胞培養結果や細胞製造コスト低減試算結果を紹介する。

【特別講演-1】

第2日目 7月3日(木) 13:30~15:00

座長:堀本 泰介(東大)

SL1-1 高病原性鳥インフルエンザウイルスに対するワクチンと抗ウイルス薬の有効性

○河岡 義裕

UTOPIA(東京大学新世代感染症センター)

2024年に米国の乳牛で感染が確認された高病原性鳥インフルエンザウイルスは現在も流行が継続している。本発表では、このウイルスの性状、ワクチンおよび抗インフルエンザ薬の有効性について報告する。

SL1-2 馬インフルエンザ

○根本 学

日本中央競馬会 競走馬総合研究所

馬インフルエンザは伝播力が強く急拡大することから、発生すると馬産業に大きな影響を及ぼす。本講演では、本病の診断方法、国内での発生状況、そしてワクチンおよびワクチン株選定について紹介する。

SL1-3 北海道大学における鳥インフルエンザワクチンの開発

○磯田 典和 1,2,3,4、日尾野 隆大 1,2,3,4、迫田 義博 1,2,3,4

1 北大院 獣医 微生物、2 北大 One Health リサーチセンター、3 北大 人獣研、4 北大 ワクチン拠点

北海道大学は国内備蓄用鳥インフルエンザワクチンを開発した。現在流行している H5 亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスと抗原性の違いが危惧されたため、現在流行株でワクチンを新たに試製し、それを評価した。

【特別講演-2】

第2日目 7月3日(木) 15:15～16:15

座長:高田 礼人(北大)／長谷川 秀樹(感染研)

SL2-1 京都市に生息するマダニから分離した、(未)人獣共通感染症としてのトゴトウイルス

○前田 秋彦 1

1 京都産業大学 生命科学部 環境衛生学教室

京都のマダニから分離したオルソミクソウイルス科・トゴトウイルスはヒトへの感染が認められていない(未)人獣共通感染症である。私の講演では、その生態学や、実験動物への感染性・病原性について紹介したい。

SL2-2 Thogoto および Oz ウイルスの動物への感染

○前田 健 1

1 JIHS 国立感染研 獣医科学部

国内には少なくとも2種類のトゴトウイルス属に属するウイルス、Thogoto ウイルスと Oz ウイルス、が存在している。両ウイルスの分離されたマダニ種ならびに動物での抗体保有状況からヒトへの感染リスクについて考察する。

【特別講演-3】

第2日目 7月3日(木) 16:15～17:05

SL3-1 ハンタウイルス肺症候群について

○海老原 秀喜

JIHS 国立感染研 ウイルス第一部

SL3-2 フィロウイルスについて

○高田 礼人

北海道大学 人獣共通感染症国際共同研究所

インフルエンザ研究者交流の会 会則

第1章 総則

第1条 本会は、インフルエンザ研究者交流の会(英語名:The Japanese Society for the Control of Influenza)と称する。

第2条 本会は事務局を設置し、事務局長の所属機関に置く。

第3条 本会は、国内のインフルエンザ研究者がインフルエンザ制圧に関する基礎研究、臨床研究、行政上の課題等について情報交換、発表、討論を行い、それを通してインフルエンザの制圧に貢献することを目的とする。

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

学術集会(シンポジウム)、講演会、研究会等の開催

メーリングリストによる会員間での情報交換

その他本会の目的を達成するため必要な事業

第2章 会員および役員

第5条 (1)本会の会員は、国内のインフルエンザ研究者、医師および医療関係者で、本会の目的に賛同した者とする。

(2)本会に入会しようとする者は、学術集会等に出席し所定の手続きを行う。

(3)会員は学術集会等の出席時に、別に定める会費を納入する。

第6条 本会には次の役員を置く。

会長 1 名

事務局長 1 名

事務局補佐 若干名

監事 1 名

第7条 役員は総会において選出する。任期は 1 年とするが再任は妨げない。

第8条 会長は、学術集会を開催し、その会務を総括する。事務局長は本会の事業に必要な会員名簿とホームページの管理、学術集会の運営補助などを任務とする。事務局補佐は事務局長の任務を補佐する。

第9条 監事は会務を監査する。監事は会員から選任し、会長と事務局は監事になることはできない。

第3章 学術集会および総会

第10条 学術集会(シンポジウム)は原則的に年 1 回とし、一般演題と特別講演で構成する。

第11条 総会は学術集会開催中に持たれ、次回の役員を選出する。

第12条 事務局は、次回の会長候補を総会に推挙する。

第4章 会計

第13条 本会の会計は会費、賛助金その他の収入をもってあてる。

第14条 会費の額は事務局が提案し総会の承認を得て設定される。

第15条 会長と事務局長はそれぞれ学術集会と事務局の会計をまとめ、監事による監査を受ける。

第5章 会則の変更

第16条 会則は総会の議決を経て変更することができる。

附則

1. 本会は 1986 年 4 月 1 日に設立され、本会則はこの日に制定された。

2. 本会則は 2018 年 11 月 14 日に改訂され、この日から適用する。

インフルエンザ研究者交流の会シンポジウム 開催記録

	開催年月	会長	開催地	会場	備考
1	1986年3月	大谷 明	静岡県熱海市	厚生年金 岩間荘	
2	1987年3月	加地 正郎	静岡県熱海市	厚生年金 岩間荘	
3	1988年3月	加地 正郎	大分県湯布院町	湯布院ハイツ	
4	1989年3月	杉浦 明	静岡県熱海市		
5	1990年5月	本間 守男	兵庫県神戸市	神戸セミナーハウス	
6	1991年5月	本間 守男	兵庫県神戸市	神戸セミナーハウス	
7	1992年10月	保坂 康弘	大阪府吹田市	オオサカ サンパレス	
8	1993年4月	前野 幸一郎	愛知県名古屋	愛知県医師会館	
9	1994年4月	飛田 清毅	栃木県塩原町	ホテルニュー塩原	
10	1995年4月	武内 可尚	神奈川県横浜市	メルパルク横浜	
11	1996年4月	中村 喜代人	山形県山形市	ホテル樹林	
12	1997年3月	中島 捷久	愛知県刈谷市	NTT東海セミナーセンター	
13	1998年2月	喜田 宏	北海道倶知安町	ニセコプリンスホテル	
14	1999年2月	清水 一史	新潟県南魚沼市	日本大学八海山研修所	
15	2000年4月	鈴木 康夫	静岡県三島市	東レ総合研修センター	
16	2001年1月	根路銘 国昭	沖縄県本部町	マリニピアザオキナワ	日米合同フォーラム
17	2002年4月	奥野 良信	兵庫県東浦町	淡路夢舞台国際会議場	
18	2003年10月	中島 捷久	沖縄県名護市	万国津梁館	Option Vと同時開催
19	2005年3月	大内 正信	岡山県倉敷市	倉敷アイビースクエア	
20	2006年3月	西村 秀一	宮城県富谷町	ユアテック人材開発センター	
21	2007年5月	菅谷 憲夫	神奈川県横浜市	パシフィコ横浜	日本インドネシア合同シンポジウム
22	2008年5月	河岡 義裕	東京都港区	東大医科研	
—	2008年7月	西村 秀一	東京都港区	日本大学医学部(板橋)	緊急シンポジウム
23	2009年7月	西村 秀一	東京都港区	東大医科研	
24	2010年7月	西村 秀一	長野県軽井沢町	日本大学軽井沢研修所	
25	2011年6月	田代 真人	富山県富山市	富山国際会議場	
26	2012年5月	高橋 和郎	福島県北塩原村	裏磐梯猫魔ホテル	
27	2013年6月	喜田 宏	北海道札幌市	北大獣医学研究科	
28	2014年7月	伊藤 壽啓	鳥取県鳥取市	鳥取市総合福祉センター	
29	2015年5月	三田村 敬子	東京都港区	東大医科研	
30	2016年6月	本郷 誠治	山形県山形市	山形市保健センター	
31	2017年6月	鈴木 隆	静岡県静岡市	静岡市産学交流センター	
32	2018年6月	藤井 豊	香川県高松市	サンポートホール高松	
33	2019年6月	中屋 隆明	京都府京都市	京都府立医科大学	
34	2021年7月	村木 靖	岩手県矢巾町	岩手医科大学	Web開催
35	2022年7月	齋藤 玲子	新潟県新潟市	新潟大学医学部	Web開催
36	2023年6月	坂口 剛正	広島県広島市	広島県医師会館	
37	2024年7月	長谷川 秀樹	愛媛県松山市	愛媛県医師会館	
38	2025年7月	高瀬 明	東京都八王子市	八王子市学園都市センター	
39	2026年7月	堀本 泰介	東京都文京区	東京大学農学部	

謝辞

本シンポジウムの開催にあたり、ご支援いただきました、日本ウイルス学会、
日本獣医学会微生物学分科会、インフルエンザ研究者交流の会の皆様に
厚く御礼申し上げます。

第 39 回インフルエンザ研究者交流の会シンポジウム

会長 堀本 泰介